



F U N D A C I Ó N
Real Madrid
Football School Japan

レアルマドリード・ファンデーション・フットボールアカデミー 指導理念

サッカーは楽しむもの

サッカーはチームスポーツ

本当の「個の力」の意味を理解する

認識→分析→判断を磨く

個人技(行動)の練習は、自分でやる

やたら教え過ぎない

周囲のサポートに感謝する

レアルマドリードという言葉から連想するイメージは、巨額の移籍金を積んでスターを買い漁る銀河系軍団だと思います。選手を育てる気なんて全くないのでと疑われることがありますが、それは誤解です。レアルマドリードは、トップチームのコンセプトと育成の理念を明確に分けているのです。育成からトップチームに入れるのは年に1人いるかないかです。それ以外の子は不合格者になってしまうのです。育成機関というのは不合格者を量産するためにあるべきではなく、合格者を排出するためにあるのです。なので、レアルマドリードの育成の目的は、レアルのトップチームに入れるのではなく、『素晴らしいサッカー選手、素晴らしい人格の人間になること』です。これであれば全員合格できます。どんな国に行っても、どんなチームに入っても、どんな監督のもとでも、即座に適応し、パフォーマンスが下がらない人材を育成するのです。レアルマドリードは自らのクラブの強化のことだけを考えてはいません。事実、世界という規模で見た場合、プロサッカー選手はレアルマドリード育成出身が最も多いのです。環境の変化に動じない人材を排出するのがレアルマドリードの育成理念の中心なのです。ではより詳細なレアルマドリードの指導理念を見て行きましょう。 裏面へ▶

レアル・マドリード・ファンデーション・フットボールスクール 指導理念

1、サッカーは楽しむもの

サッカーは、つらさに耐えることが目的ではない。精神修行の道具でもない。サッカーは楽しむもの。サッカーはゲーム。楽しければ自然と子供は夢になり、一生懸命になる。プレステやDSなどのゲームをやっている子供は寝食を惜しんでゲームに熱中する。次のステージに行くんだ！って自ら努力する。そしてあっという間に上手くなる。それは楽しいから。サッカーはゲーム。もし夢中になっていないとしたら、それはサッカーが楽しくないから。夢中になってやること。それがサッカーが上手になる一番の近道。

2、サッカーはチームスポーツ

仲間を理解し、尊重し、仲間を活かす。子供の頃は、少しドリブルが上手だったり、シュートがうまかったりすると、ほとんどの状況は打開でき、チームも勝ったり出来るし、なにしろ目立つことが出来る。だから子供も個人技の練習をやりたがるし、テクニック重視のスクールも多い。勝つことが必要なクラブチームでは個人のテクニックに頼った方が勝利しやすい。しかし、テクニックは上のレベルに行くと、必ず自分より上のテクニックの人間が現れる。世界は広いので、必ず現れ、そして止められる。その時に、個人技以外の選択肢を持っていないと、突然全く通用しない選手になってしまう。そこから仲間を活かす練習をすれば良いのだけれど、テクニック重視で育った子どもは、全体をみて、他人を理解し、他人を活かすという発想には簡単には変わらない。出来る限り早い段階で、個人技に頼るクセから脱却し、仲間を活かし、様々な選択肢を自分で作り、その中から状況に合った判断が出来る子供に育てる。学校や、会社に入った時、自分だけでは生きていけない。仲間を理解し、尊重し、仲間を活かすこと。組織として機能するというのは、個性を殺して型に合わせるのではなく、個性を理解し、個性を活かし合うこと。

3、本当の「個の力」の意味を理解する

「個の力」を個人技やフィジカル強化と誤解している人が多い。個の力は、「観察→認識→判断→行動」の4つのプロセスの成果。ドリブルやリフティング、シュートの練習やフィジカル強化は、この4つの中の「行動」を磨くもの。しかし、観察→認識→判断が抜けていると、意味不明な行動になることが多い。自分本位や試合展開を考えていないプレーが多くなる。判断が間違っているって個人の行動はチームにとって逆にリスクとなる。観察→認識→判断を磨くには、「経験」するしかない。どれだけ多くのシチュエーションを過去に経験し、蓄積しているかが勝負となる。それを瞬時に応用して、瞬時に行動に移せるかが真の「個の力」。行動を磨くのは後からでも出来る。しかし経験は早く始めた方が蓄積量は多くなる。出来るだけ早くから、認識→分析→判断を磨くトレーニングをした方が良い。それには断片を切り取った練習ではなく、連動したサッカーを沢山やること。「サッカーは、サッカーでしか上手くならない」。

4、認識→分析→判断を磨く

海外では、「日本人のスキルは世界トップレベルかもしれない。ただし相手がいなければ・・・」と言われている。サッカーは相手がいるスポーツ。攻守が目まぐるしく変わり、状況は常に変化している。レベルが上がると、周囲から指示してもらおう猶予などない。そこでは、その瞬間の状況を認識し、瞬時に分析し、選択肢を揃え、その中から最適な判断を下せるが勝負を分ける。海外では、アスリートは引退してからも尊敬され続ける。様々な状況判断を瞬時にしなければならぬ経験をしている特別な人たちだから。日本ではそうはいかない。引退した途端、「子供の頃からスポーツ一筋で、世間知らずで何も出来ない人」のような見られ方を。スポーツを通して、このような状況判断トレーニングを積んでいると、その後の人生で必ず訪れる「決めなければならない場面」で抜群の判断力を発揮する。長い人生においては状況判断能力が必要な場面は幾度となく訪れ、その結果次第で全く違う人生を送ることもある。

5、個人技(行動)の練習は、自分でやる

個人のテクニックは、「ボールと自分」の関係性のものであり、ボールがあれば自分一人で練習できる。わざわざ集まってするものではない。せっかく様々な個性が集まっているのに、そこでドリブルやリフティングなどの個人練習をするのは時間もったいない。サッカーの試合は、ボール1個に対して22人の人間がいる。1試合でボールに触っている時間は1分~2分程度。それ以外の大半の時間に何をすべきかがとても大切。その1~2分のための練習ばかりやってもサッカーは上手くならない。ボールは自分で動かないが、人間はそれぞれが複雑に動く。だから人間の動きを理解する練習がとても大切。それは集まった時にしか出来ない。確かに足元のテクニックが伴っていた方が上手いく。しかし、そこで上手いかなかったことに対して過度にストレスを感じてもらうことは悪いことではない。そういう子は自分で個人技の練習を始める。テクニックは目的ではなく手段であるということを感じて、自分で習得しようと思えば上達も格段に早い。やらされ詰め込まれるより、自分で必要だと感じたことを身に付けていく。当校の練習は1回1時間強しかなく、その短い時間だけでサッカーが突然上手くなるわけがない。その練習の中で、課題を見つけ、次の練習までに克服し、答え合わせをする。持っている時間全体の中で上達してもらうことが大切。

6、やたら教え過ぎない

自分で考え、自分で判断し、自分で行動する選手に育ってほしい。大人が教えすぎること、子供は自分で考える力が落ち、指示を待たなければ動けなくなってしまう。子供たちの試合を見に行くと、お父さんやコーチが選手に、「シュート!」とか「ドリブルで抜け!」とか「逆サイド!」とか、とにかく指示が多い。これでは自分で考えられる子には育たない。大人の「教えたい」という気持ちは悪いことではない。でも教え過ぎるとそれは指示待ちの子供を作ってしまう可能性がある。自分で考えられなくなると、コピー&ペーストに頼るようになる。資料ひとつ自分で作れなくなり、雛形やサンプルを探すようになる。答えは与えられるものでなく自分で見つけ出すということを感じてもらうため、当校では極力答えは与えない。怒鳴るコーチに強烈に教えられたチームは、大人のコピーが進むので、ある年代までは良い成績を残す。しかし、「教えられた子はもろい。学んだ子は強い」。その後は自ら学んだ子の方が成長が加速する。当校は教えるのではなく、学べる環境を作る。環境とは、適切な練習メニューと適切な声かけ。コーチは、自分のコピーを作るのではなく、子どもが自分で学べる最高の環境を作ることに専念する。

7、周囲のサポートに感謝する

プロの選手になると、栄養士、トレーナー、マネージャー、スポンサーなど様々なサポートに支えられて初めてプレーすることが出来る。スクールに通う子供も、食事、送迎、洗濯、用具の購入、受講料などの父兄のサポートがなければスクールに通うことは出来ない。子供の頃は、そのような父兄の様々なサポートに気付かず、感謝する機会もない。親になって初めて、自分の親のサポートに気付くことが多い。まずはサッカーをやらせてもらっている環境に感謝し、それを支えてくれている父兄や周囲のサポートに感謝する。そのインテリジェンスがなければ、決して素晴らしい選手になることは出来ない。